

東アジア海域を一体として展望する歴史に 関心が集まりつつあるいま、 日宋交易研究の基本文献を復刊。

2015年9月、
全巻完結!

主著『日宋貿易の研究』『続日宋貿易の研究』『続々日宋貿易の研究』に、
『増補日宋文化交流の諸問題』『遣唐使』などを含む各編を加え、
森克己の研究業績を一望する。

全巻索引、地図などの資料のほか、第一線の研究者による詳細な解説を付す。

● 編者

新編森克己著作集編集委員会

伊原 弘 (いはら・ひろし)
中国宋代史研究者

榎本 渉 (えのもと・わたる)
国際日本文化研究センター准教授

小島 毅 (こじま・つよし)

東京大学大学院人文社会系研究科教授

手島崇裕 (てしま・たかひろ)

慶熙大学校外国語大学助教授

● 著者プロフィール

森 克己 (もり・かつみ)

一九〇三年〜一九八一年。歴史学者。専門は対外関係史。東京帝国大学文学部国史学科卒業。史料編纂官をつとめた後、満洲建国大学教授、九州帝国大学法文学部教授、横浜市立大学文学部教授、東京都立大学人文学部教授を歴任し、中央大学文学部教授。
主な著作に『日宋貿易の研究』『続日宋貿易の研究』など。一九四九年に西日本文化賞受賞。

全
5
巻

新編 森克己 著作集

新編森克己著作集編集委員会〔編〕

体裁◎A5判上製カバー装・各巻約400頁 定価◎各巻10000円+税

日宋交流史研究の泰斗、新装著作集。

2015年9月、全巻完結!

勉誠出版

新編 森克己著作集

新編森克己著作集編集委員会〔編〕

A5判上製カバー装・各巻約400頁
セット定価 50,000円+税

セット

第1巻 新訂日宋貿易の研究

2008年12月刊

本体 10,000円+税
ISBN 978-4-585-03200-7 C3320

冊

第2巻 続日宋貿易の研究

2009年4月刊

本体 10,000円+税
ISBN 978-4-585-03201-4 C3320

冊

第3巻 続々日宋貿易の研究

2009年10月刊

本体 10,000円+税
ISBN 978-4-585-03202-1 C3320

冊

第4巻 増補日宋文化交流の諸問題

2011年1月刊

本体 10,000円+税
ISBN 978-4-585-03203-8 C3320

冊

第5巻 古代～近代日本の対外交流

2015年9月刊

本体 10,000円+税
ISBN 978-4-585-03204-5 C3320

冊

お名前 ふりがな () ご住所

書店印

お電話番号 ()

勉誠出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-10-2 website・http://bensei.jp/
Tel・03-5215-9021 Fax・03-5215-9025 E-Mail・info@bensei.jp

*書店さまは着荷次第お客様にご連絡ください

※ご記入いただいた個人情報は、ご注文書籍の発送、お支払い確認などの連絡および、ご希望いただいた方への刊行案内をお送りするために利用し、その目的以外での利用は致しません。

そびえたつ古典的著作

五味文彦

森克己という名は早く聞き知っていたのだが、その著作を本格的に読むようになったのは、平氏の日宋貿易の実態を探ろうとした時である。それまで見てきた史料とはおよそ質の違ったものを見るなかで、一体、このような史料にどうして注目するようになったのかと、ふと考えたものであるが、その時には必要な史料や論だけを咀嚼するだけに終わってしまった。

その後の対外関係、対外交流史の研究は格段に進展しているが、この古典的著作は今もって我々の前にそびえている。多くの古典的な著作がそうであるように、それとの格闘は新たな切り口を開くためにも重要であるばかりか、時に重箱の隅をつつくような研究に陥りがちな傾向に警鐘をならしてくれる。またその研究への情熱を知ることにより、新たな研究の必要性を痛感することにもなる。

そうした時に、最新の研究の進展を担ってきた研究者の解説が付され、新たな論考を収めて本著作集が出版されるという。私も改めて、最初に読んだときに抱いた思いや疑問などをぶっつけてみたいと思う。これからじつくり読んで、愉しみたい。

(放送大学教授・東京大学名誉教授)

先人の学問の格闘と成果

笹本正治

日本の中世遺跡を掘れば、貿易陶磁が必ずといっていいほど出てくる。森克己先生の東アジア海域を一体として見る広い視点、そして飽くなき史料の探求という研究態度は、今後ますます輝きを増し、我々を真実に導いてくれる灯台になるであろう。

下高井郡野沢村(現野沢温泉村)で一九〇三年(明治36)に生まれた先生は、ふるさとへの限らない愛情を維持され、一九七四年(昭和49)に刊行された『野沢温泉村誌』では、監修と中世部分を執筆された。現在お墓も野沢温泉村にあり、地域性をも示されている。歴史を学ぶ者として、世界性と地域性の双方は忘れてならぬ態度である。

野沢村から直線距離で約十五キロほど南西の、下水内郡秋津村(現飯山市)で一九〇一年(明治34)に生まれたのが、日本を代表する東洋史学者の宮崎市定であった。兩人のふるさとの中間に当たる下水内郡外様村(現飯山市)で一八七八年(明治11)に生まれたのが、『信濃史料』の生みの親といえる栗岩英治である。彼は一九二三年(大正12)樺太の遠淵湖で海草採取事業を企てて失敗し、一九二六年(昭和4)県史編纂会を作り、信濃史料集の必要を説き、史料を集めた。栗岩の学問姿勢はわらじ史学と呼ばれ、足で稼ぎ、実感・追体験することともに、史料を追い求めた。方向性は違うものの、私は多くの共通性を三人に感ずる。

野沢温泉村の南側、飯山市と接する木島平村の弥生時代終末期にできた根塚からは、一九九六年(平成8)に鉄剣が出土した。剣は模様や材質から朝鮮半島南部からもたらされたと推定され、日本海ルートでの直接交流を示唆した。長野県の北端でややもすると山間の辺地とされがちな森先生のふるさととは、朝鮮、そして中国へとつながる古い歴史を持つ、開かれた地であった。三人の海外への視点も、この伝統につながるであろうか。

私は本著作集から先人の学問の格闘と成果、そして時代性を学びなおし、様々な視点を見つきたい。同様に一人でも多くの方が本著作集に接することを期待し、心から推薦するものである。

(信州大学人文学部教授)

受け継がれるべき思考の泉

濱下武志

『新編森克己著作集』は、日宋関係史を中心とした、日本史からの対外交渉史の視野の元に著述されている。とりわけ朝貢関係や朝貢貿易に関して、現在の研究史に連なる研究が集約されている。すなわち中国側から見るならば「朝貢」という範疇にある宋日関係も、日本側から見ると「貿易関係を維持するための手段であったことは、「勘合貿易」や「琉球問題」などによって見ることが出来る。『新編森克己著作集』は、この日宋関係史研究に関する研究を詳細に論じている。

さらに今回の全集が編まれた目的が、現在の学界における研究動向を端的に示す海洋交易、商人の移動、交易ネットワークなど、海洋史研究に関する論考の集大成であることに鑑みれば、日宋関係史研究を網羅しているところに最大の特徴が見られることも首肯されることである。そこでは、日本側資料からみた日宋関係のみならず、宋側商人に関する論考、宋側資料に基づいた宋日関係、更には日中両者を多角的に支えた交流地であった対馬宗氏の中・近世における朝鮮交易までを含んでおり、対外交流史が双方方向によって成り立っていることを実証した歴史論を強く浮かび上がらせる編集になっていることも、本全集が改めて現代の研究の中に蘇っているという実感がある。

地理学的世界観ならびに対外認識に関する論考にも、資料に基づいた深い歴史的思考が現わされている。第3巻『続々日宋貿易』の研究に含まれた、「日宋交通と地理学的世界観——特に栗棘庵の輿地図について——」、「欧米来航以前の海外交通と世界認識」、「欧舶来航以前の所謂「南蛮」などは代表的な成果であり、歴史研究から論ずる地図、歴史から論ずる空間認識などについて現在の歴史地理研究につながる議論が示されている。とりわけ「行基図」が朝鮮に伝わり「混一疆理歴代国都之図」に取り入れられていることが指摘されるなど、歴史地理研究への方法的な提言も改めて確認される。

総じて、『新編森克己著作集』は、歴史研究と歴史家、歴史家の歴史体験、歴史研究における戦前戦後にまたがった史学史の体験的な表出などに関して、代々受け継がれるべき汲み尽くすことがない思考の泉である。

(龍谷大学国際文化学部教授)

森克己氏の業績によせて

松浦 章

一九四五年に日本はアジア・太平洋戦争に敗戦し、海外植民地を喪失すると、学術研究にも影響を与え、それまで盛んであった日本と海外諸国との交流、交渉、関係史に関する分野の研究は火が消えた如く停滞することになった。そのような時期に、特に前近代の海外関係史の分野で孤軍奮闘されていたのが、台湾から帰国され東京大学で近世の対外関係を研究された岩生成一氏(一九〇〇年生)、本著作集の著者である森克己氏(一九〇三年生)と、室町時代を中心に海外交渉を研究された田中健夫氏(一九二三年生)とであったと言っても過言ではない。

森克己氏は、日本の平安時代から鎌倉政権の時期、十世紀後半から十三世紀後半にかけて中国大陸に庶民文化を開花させたとされる北宋、南宋朝との文化交流に焦点化した精緻で緻密な成果を続々と公表された。近年東アジア海域を中心とする交流研究が注目され多くの成果が上梓されるようになったが、森氏は遙か以前からこの分野の研究に先鞭をつけられていたのである。とりわけ一九四八年に国立書院より公刊された学位論文『日宋貿易の研究』を、二十余年後の一九七五年に『新訂日宋貿易の研究』として出版された同書の特徴は、単に交流の事実を解明されたものではなく、日本と中国との相互交流にいたる内定要因を「我が受動的貿易の展開」、「我が能動的貿易の展開」として両国の国情を鋭く分析された視点にある。そして貿易形態を「自由貿易」から「統制貿易」の変化・推移に着眼点を置かれるなど、極めて大局的な視点で日宋両国の関係を見ておられた。そのような研究姿勢は、啓蒙書ではあるが『遣唐使』(日本歴史新書)にも充分に反映されている。

このような森克己氏の成果は、巷間入手困難になり韓国では海賊版が出版される状況であった。今回、勉誠出版から広く多くの読者に向け森氏の成果が提供されることにより、さらなる東アジア海域研究の広まりと研究の新展開を期待するものである。

(関西大学アジア文化交流研究センター長、関西大学文学部教授)

刊行のことば

このたび勉誠出版から『新編 森克己著作集』全五巻を刊行できるのは喜ばしいことである。私の専門は元来「中国思想史」で、当今の狭隘な学術編制からしたら、森氏の論攷を一生読まないで済んでしまったかもしれない。幸い、斯波義信教授のもとで学ぶ機会を得たため、森氏の日宋貿易に関する業績に触れることとなった。明治生まれの浩瀚な学識と、当時としてはきわめて斬新な視点とが織りなす交流史の綾は、経済史が苦手だった私から見ても美しい芸術品に映った。

縁あって、東アジア海域交流の共同研究の取りまとめ役を務めるようになり、その資格と立場で今回の編集委員に名を連ねることができた。そのため、これも作成者側からの自薦の辞と受け取られる虞なしとしないが、本著作集はいわゆる歴史学専攻の者だけでなく、文学・美術・思想・宗教等々、交流史に関心を持つ以上は、あらゆる専攻分野の者が読むべき古典的研究である。

近年、ともすると、自分の問題関心領域を狭めに設定し、その枠の中に収まる先行研究しか見ようとする傾向が、学界全般に拡がっている。若いうちに多くの業績をあげ、さらにそれらをまとめて博士學位申請論文を仕上げることを強要される環境にある以上、一概に当事者だけを責めて済む問題ではない。しかしながら、博士論文とは、広い学識の裏付けを持ったうえで、己が専攻する分野における新境地を開拓して斯界に提供されるべきものであろう。この原点をゆるがせにしたら、人文学は崩壊する。そうした観点からすると、森氏の書く論文は、その内容・結論もさることながら、その姿勢・手法の点において、今でも学ぶべきものを多く具えている。

今回の新編著作集は、森氏の業績の全貌をほぼ窺うことができる。各巻に付せられた解説等と併せ読むことで、読者の視界が開けることを期待する。

小島 毅

最近、二度にわたって福岡市と大宰府を訪れる機会があった。本全集編纂の母体である科研プロジェクトに出席するとともに、古代から近世、否、今日も国際交易港として大きな存在である博多の遺跡を見学するためであった。都市の地下には古代から中世にかけての外交施設たる鴻臚館や中世の町が埋もれているが、その発掘現場を見学したのである。これらの遺跡こそ森克己先生が精魂をこめて研究された日宋貿易の舞台の場であった。

先生の論文は該博な知識と精緻な史料追及によって成り立っている。文章も平易で読みやすく、利するところが大である。先生が日宋交渉史にまい進されていたころは、第二次世界大戦をはさんで日本語が大きく変化した時代である。よって、ときに古いと思われる文体があるが、読みにくいわけではない。先生の論文が読みやすくて得ること大であることは、この時代のこの課題にかかわる文章を書くものが依拠していることから推測できる。参照者には司馬遼太郎のような国民作家もいる。専門家ならずとも読みふけるといわれる本書が再度公刊され傍らにおけるのは無上の喜びである。いやしくも交渉史に興味を抱くものには格別の書となるはずである。編集者としてではなく、一読者としてお勧めしたい本である。

伊原 弘

第1巻

新訂 日宋貿易の研究

序 斯波 義信

新訂版刊行にあたって

- 序 日宋貿易の特殊性
- 序 陸と海との相関性
- 序 研究範囲の限界
- 序 叙述の構成
- 第一編 日宋貿易の端緒的形態
- 第二章 東洋国際貿易の普遍型
- 第三章 外国使節と外国商人の差別
- 第一節 蕃客と商客
- 第二節 来朝外国人の身分査照
- 第三章 平安京貿易の展開
- 第一節 外交部門に現れたる内政的情勢
- 第二節 渤海国使の入朝
- 第四章 大宰府貿易の展開
- 第一節 外国商船の米航
- 第二節 大宰府鴻臚館の委實
- 第三節 貿易統制の機構

第2巻

続 日宋貿易の研究

序

- 第一章 海路による東方貿易の展開
- 第二章 日宋交通と海洋の自然的制約
- 第三章 日唐・日宋交通の航路の発達
- 第四章 遣隋使と遣唐使

- 一 聖徳太子の対外方針と遣隋使
- 二 大化改新政治と遣唐使
- 三 半島情勢と遣唐使
- 四 遣唐使の活動
- 五 留学生・留学僧の文化活動
- 六 天平文化の世界性
- 七 遣唐使の廃絶
- 第五章 欧船来航以前の海外交通と技術的制約

第3巻

続々 日宋貿易の研究

第一章

- 日本商船の高麗・宋への進出の端緒
- 一、邦人海外渡航の禁止
- 二、宋商船の来航と密貿易
- 三、日本商船の高麗渡航
- 四、日本商船の宋への進出

第二章

- 日・宋と高麗との私献貿易

第三章

- 日麗交渉と倭寇の発生

第四章

- 日宋貿易と鎌倉時代

第五章

- 鎌倉時代の

第4巻

増補 日宋文化交流の諸問題

増補版刊行にあたって

序

- 序 日宋文化交流の特殊性
- 一、大陸側史籍における倭女王国の問題
- 二、日宋交通と日宋相互認識の発展

三、

- 日宋文化交流と日宋相互認識の発展

序

- 一、わが遣唐使と唐朝の日本認識
- 二、わが国の受動的な交通と日宋相互認識
- 三、わが能動的な交通と日宋相互認識
- 四、日宋相互接近

- 四、日宋文化交流における人的要素

特に宋唐留民について

五、日宋交通と末法思想的宗教生活との連関

第5巻

古代・近代日本の対外交流

◆交流史研究

古代後期の政治と外交

はしがき

- 一、半島問題の展開
- 二、中央集権政治の胎動と外交
- 三、大化改新政治と対外政策
- 四、外交の転換と古代天皇政治の発展
- 五、遣唐使と新羅・渤海との関係
- 六、律令政治機構の破綻と遣唐使制度の弛緩
- 七、遣唐使制度の廃止と対外方針の転換
- 八、律令政治機能の衰退と対外関係の推移
- 九、古代政治の没落と古代外交の終焉

遣唐使船の多難な航海

- 一、中国船の海外進出
- 二、中国商船の構造
- 三、すぐれた航海知識
- 四、指南針の使用
- 五、遣唐使船の航海

貿易統制の改革
 第一節 寛平・延喜政治の歴史的意义
 第二節 外国商船来航制限方針
 第三節 貿易管理手続の簡略化

第二編 **我が受動的貿易の展開**

第一章 我が政府の対外方針
 第二章 宋朝政府の対外方針
 第三章 我が対外方針に於ける内的矛盾

第四章 内的矛盾の展開

第一節 貿易統制没落の素因
 第二節 貴族階級に於ける無反省的傾向

第三節 官吏の個人主義的行為
 第四節 貿易統制の弛緩

第五章 内的矛盾の激化
 第六章 内的矛盾の止揚

第三編 **我が能動的貿易の展開**

第一章 輸入品と其の受容

第一節 輸入品
 第二節 輸入品受容能力の進展
 第三節 輸入品流通範囲の拡大

第二章 能動的貿易の基礎構成

第一節 商業的機能の発達
 第二節 対外発展の基礎的地盤の成立
 第三節 輸出品

第三章 能動的貿易の発展過程に於ける高麗の地位

第一節 日麗交渉の展開
 第二節 自然的条件と技術的制約
 第三節 日・宋・麗貿易関係の本質

第四章 能動的貿易の飛躍的発展

第一節 我が商船の大陸への進出
 第二節 鎌倉幕府の対外貿易方針
 第五章 能動的貿易の変質

第一節 元寇と能動的貿易
 第二節 武装商人団の発生
 第三節 武装商人団発展の社会的必然性

第四章 貿易の展開と関税的性質の発生

第一章 唐宋時代海関税の発達

第二章 貿易に於ける献納品の性質
 第三章 献納品の変質
 第一節 荘園の発展と献納品
 第二節 自発的より強制的へ
 第四章 献納品の関税化
 第一節 関税化への社会的必然性
 第二節 公的要素の発生

第五編 **自由貿易より統制貿易への復帰**

第一章 日宋貿易効果の国内経済への内転

第一節 宋朝貿易方針の矛盾
 第二節 宋朝銅銭の流入と我が社会経済の進展

第二章 我が社会経済の貿易への反転

第三章 日麗貿易の展開

第一節 世界貿易路に於ける大陸の地位
 第二節 日元国際関係の推移と貿易の統制化

附録 **日・宋・麗交通貿易年表**

【解説】
 日宋貿易研究とその今日の意義について——伊原 弘

森克己の研究の意義と問題点——山内 晋次

【月報】
 江静「元日貿易における寧波」
 出口晶子「中国船三態」
 小曾戸洋「宋の医学と日本」

第六編 **遣唐使と新羅・渤海との関係**

第七章 遣唐使と新羅との関係

一 白村江戦後処理外交
 二 入唐留学生・僧らと新羅道

三 日麗関係の転換期
 四 南島入唐路の発見
 五 鈴木靖民氏に答う

第八章 古代南方との交渉

一 西南諸島の来服
 二 東南アジアとの交渉
 三 流求認識の進歩

第九章 万葉集と対外政治

第十章 慈覚大師と新羅人

第十一章 遣唐使廃止に対する再吟味

第十二章 末期日唐貿易と中世的貿易の萌芽

第十三章 転換期十世紀の対外交渉

第十四章 日宋交渉の発展過程

一 宋商船の来航
 二 日本商船の海外進出
 三 元寇への展開

第十五章 日宋貿易に活躍した人々

一 唐商船の海外渡航
 二 日本来航の宋商人
 三 宋商と日本要人の結託
 四 日本居留の宋商人
 五 日本の貿易家

第十六章 東宮と宋商周良史

第十七章 参天台五台山記について

第十八章 戒覚の渡宋記について

第十九章 日本・高麗来航の宋商人

第二十章 日宋貿易における中国商人の性格

第二十一章 日宋交通と耽羅

第二十二章 日宋麗連鎖関係の展開

一 唐商船の来航
 二 中世的貿易の萌芽
 三 日本商船の海外進出と技術的制約
 四 日宋麗の政治的關係
 五 日宋麗貿易の連鎖関係
 六 連鎖関係の崩壊

第二十三章 日麗交渉と刀伊賊の来寇

【解説】
 日宋貿易——榎本 涉
 大宰府鴻臚館・博多——大庭 康時
 新羅・渤海・高麗——渡邊 誠

【月報】
 八重樫忠郎「平泉の発掘事例」
 宮崎紀子「中国から見た日本美術」

第六編 **日元交渉**

第七章 金沢文庫文書に現われた日元貿易

第八章 日宋文化と金沢文庫

第九章 日宋・日元貿易と貿易品

第十章 宋銅銭の宋国外流出

第十一章 金都上京出土の宋銭

第十二章 宋銅銭流通への基盤

第十三章 宋銅銭の我が国流入の端緒

第十四章 日宋貿易と奥州の砂金

一、砂金の発見
 二、遣唐使と奥州の砂金
 三、宋商人と奥州の砂金
 四、荘園領主の貿易と砂金
 五、奥州砂金の宋・元に与えた影響

第十五章 日宋交通と地理学的世界観

第十六章 地理学的世界観に特に関連の輿地図について

第十七章 日宋交通と地理学的世界観

第十八章 日宋交通と地理学的世界観

第十九章 日宋交通と地理学的世界観

第二十章 日宋交通と地理学的世界観

第二十一章 日宋交通と地理学的世界観

第二十二章 日宋交通と地理学的世界観

第二十三章 日宋交通と地理学的世界観

第二十四章 日宋交通と地理学的世界観

第二十五章 日宋交通と地理学的世界観

第二十六章 日宋交通と地理学的世界観

第二十七章 日宋交通と地理学的世界観

第二十八章 日宋交通と地理学的世界観

第二十九章 日宋交通と地理学的世界観

第三十章 日宋交通と地理学的世界観

第三十一章 日宋交通と地理学的世界観

第三十二章 日宋交通と地理学的世界観

第三十三章 日宋交通と地理学的世界観

第三十四章 日宋交通と地理学的世界観

第三十五章 日宋交通と地理学的世界観

第三十六章 日宋交通と地理学的世界観

第三十七章 日宋交通と地理学的世界観

第三十八章 日宋交通と地理学的世界観

第三十九章 日宋交通と地理学的世界観

第四十章 日宋交通と地理学的世界観

第四十一章 日宋交通と地理学的世界観

第四十二章 日宋交通と地理学的世界観

第四十三章 日宋交通と地理学的世界観

第四十四章 日宋交通と地理学的世界観

第四十五章 日宋交通と地理学的世界観

第四十六章 日宋交通と地理学的世界観

第四十七章 日宋交通と地理学的世界観

第四十八章 日宋交通と地理学的世界観

第四十九章 日宋交通と地理学的世界観

第五十章 日宋交通と地理学的世界観

第五十一章 日宋交通と地理学的世界観

第五十二章 日宋交通と地理学的世界観

第五十三章 日宋交通と地理学的世界観

第五十四章 日宋交通と地理学的世界観

第五十五章 日宋交通と地理学的世界観

第五十六章 日宋交通と地理学的世界観

第五十七章 日宋交通と地理学的世界観

第五十八章 日宋交通と地理学的世界観

第五十九章 日宋交通と地理学的世界観

第六十章 日宋交通と地理学的世界観

第六十一章 日宋交通と地理学的世界観

第六十二章 日宋交通と地理学的世界観

第六編 **平重盛とその時代**

一、平家時代の出現

二、重盛の性格

三、重盛の歴史的活動

四、重盛の死

五、重盛没後の平家

七、日宋交渉と宋人の日本風俗への関心

八、宋人の手になる浅間神宮寺写経

九、日宋交通と阿育王山

一〇、仏舍利相承系図と日宋交通との連関

一一、日唐・日宋交通における史書の輸入

一、唐交通以前における史書の輸入
 二、遣唐使と史書の輸入
 三、史書輸入経路の拡大
 四、いわゆる三史
 五、宋朝印刷術の進歩と宋契本の輸入
 六、宋朝の禁書方針と史書の流出
 七、宋契本の需要
 八、三史書籍に対する一般関心の後退
 九、三史歴史に対する批判力の発達と新史書の輸入

一二、日宋交通と宋代典籍の輸入

一三、宋代契本の禁輸と日本への流出

一、朝の求書と刊行
 二、契本禁輸方針
 三、禁輸方針の解消
 四、宋版一切経輸入に対する社会的考察
 一五、日・宋元絵画交渉と雪舟の出現
 一六、吉備大臣入唐絵詞の素材について
 一七、唐本頂相とその画稿
 一八、宋拓六祖像と明兆の画風
 一九、鎌倉大仏と日元貿易
 一、史料の基礎的研究
 二、鎌倉大仏の造立過程に対する疑問
 二〇、九州と宋・元文化
 一、来文化と鴻臚館
 二、呉越国の影響
 三、宋商船の来航と日宋文化交流
 四、荘園の密貿易
 五、日本商船の宋への進出と南宋文化
 二二、大陸文化と日本扇
 二三、伝書鳩
 二四、謡曲「石橋」の歴史性

【解説】
 日宋交通と彫刻様式の転換——塚本 磨
 日宋文化交流史——原 美和子
 書籍——高津 孝

【月報】
 馬淵和雄「鎌倉の発掘事例」
 柳原敏昭「中世対外関係史研究のなかの坊津」

第六編 **遣唐使**

第一章 遣唐使の先駆

一、日本と中国
 二、半島問題
 三、国内改革
 四、遣唐使
 五、遣唐留学生

第二章 遣唐使制度の発達

一、大化の改新と遣唐使
 二、半島問題の終末
 三、外交の転換
 四、遣唐使存在価値の増大

第三章 遣唐使の全貌

一、その組織
 二、その船舶
 三、その航路
 四、その航海術
 五、航海中の有様

第四章 遣唐使をめぐる国際関係

一、唐の待遇と遣唐使の態度
 二、新羅との関係
 三、渤海との関係

第五章 遣唐使の文化の輸入

一、遣唐使の選任
 二、遣唐使の文化活動
 三、留学僧の宗教的・文化的活動

第六章 遣唐留学生の文化の輸入

一、留学期間と留学生数
 二、学問生・請益生の文化への貢献
 三、留学僧の宗教的・文化的活動

第七章 遣唐使随伴の帰化人

一、帰化唐人の文化活動
 二、印度人・西域人の来朝
 三、東西文化の交流

第八章 遣唐使の廃止

一、唐文化受容の問題
 二、遣唐使派遣費負担能力の減退
 三、遣唐使の入唐忌避の風潮
 四、唐商船の来航と遣唐使への終止符

◆ **日宋・日元貿易の展開**

◆ **鎌倉幕府の対僧兵政策**

◆ **島原の乱後の移民政策**

◆ **天草の海外出稼女の研究**

◆ **名香山村史序文**

【解説】
 遣唐使——榎本 淳一
 東アジア交流史——小島 毅
 座談会 森克己論集再版と思い出
 石井正敏・伊原弘・榎本涉・川添昭二・小島毅

◆ **全巻索引・地図**

【月報】
 橋本久和「日宋貿易と流通拠点」
 海津一朗「蒙古襲来と「日本文化」」